アマモ場の再生から保全へ
～漁業者の意識変化と活動の輪の広がり～

日生町漁業協同組合　組合長
田 丸　和 彦

誌編集者より「柳先生の功績だけでなく、お人柄にも迫ることができるような特集を」ということで執筆のお依頼があった訳ですが、頭に浮かんだのは、「2016（平成 28）年 6 月、第 9 回全国アマモサミット in 備前が 2 日間に亘って当組合周辺で開催され、サミットの中心となるパネルディスカッションのコーデュネーターとして、里海誕生 20 周年記念シンポジウム基調講演を行っていただいた。」ことが思い浮かばれます。また、今ではアマモ場の再生保全の主力部隊となりつつある日生中学校での聞き書きにも日頃の仏頂面ではなく優しい笑顔で参加いただいたことも今になっては価値ある思い出です。

アマモ場の再生に係る日生町漁業協同組合の中心人物であった故本田和士は平成 23 年にお亡くなりになっていますが、この方も言いたいことを言うお方で、柳先生とある意味似たり寄ったりのところがあります。お二人が、雲の上で激論を交わしつつも、旅立仲良くアマモの種を蒔いていることを望まずにはいられません。

さて、昭和 54 年頃から研究をスタートしたアマモ場の再生も紆余曲折はあったものの最も繁茂していた 590ha の約半分の 250ha まで回復いたしました。つぼ網と呼ぶ小型定置網の漁業者を中心に、漁獲量の減少に憂いたことをきっかけにアマモ場の再生活動に取り組んだ訳ですが、アマモ場の回復の割には肝心の漁獲量が戻ってこないこともあって、漁業者からは失望の声を聴くことがあります。もちろん、漁獲量の減少はアマモ場だけのせいではないのですが漁業者は物事をシンプルに考えます。

一方、この再生活動は漁業者以外の広がりを見せ、2013 年以降は地元の日生西小学校、日生中学校や岡山市内から岡山学芸館高校等の学校が校外環境学習の場を求めてこの活動に参加しています。最初は日生中学校には藤田先生という方がおり、 岡山学芸館高校は柳先生も後に参加を頂いて小中学校の児童生徒の間でその輪が広がりました。子供達にはアマモのことだけでなく、カキ養殖への体験参加等、複合的な自然学習というか環境学習の場としても活用いただいています。加えて、最近では京都の中学校の毎年の参加に加え、岡山コープさんとか地元のヨータイさん等とも包括連携協定を交わしながら、その輪はますます広がりつつあります。2022（令和 4）年には初めての地元備前市民が参加するアマモ場体験学習を実施させていただくなどして、延べ 748 人の方々がアマモ場の再生活動に参加を頂きました。

当組合の役目は旗振り役であると思っています。モエビであるとかアイゴであるとかかつてはほとんど姿を見なかった藻場を好む魚が生息するようになったとか良い話もあるのですが、漁業者には肝心の漁獲量が目に見えて増えないと言うジレンマがあります。

釈迦に説法ですが、今漁業の最も大きな問題として取り上げられているのが「栄養塩の減少」と「地球温暖化」だと考えられています。アマモは物質循環の手助けをし、地球温暖化の大きな原因である二酸化炭素の吸収をします。後者はブルーカーボンと言われるものですが、このアマモ場の効用を丁寧に説明しながら漁業者にもその理解を進め、誘導しつつ、活動の輪が漁業者以外にも今まで以上に広がれば嬉しいと思っています。

当初は漁業者が見様見真似のアマモ場の再生からスタートでした。岡山県や備前市及び全国の研究者の方々のお知恵を借りながら、目的を現代にマッチさせながら、これだけの漁業者以外の参加となりことについて嬉しく思い、かつ、ご参加やご支援を頂いた関係者の方々にはお礼を申し上げたいと思いますとともに、この取組が永遠に続きますことを願ってやみません。